上智大学
SOPHIA UNIVERSITY

上智大学通信

第461号　2022年（令和4年）6月6日発行

編集・発行
上智学院総務局広報グループ
〒102－8554　東京都千代田区紀尾井町7－1
電話：03－3238－3179　FAX：03－3238－3539
www.sophia.ac.jp
[Facebook] www.facebook.com/SophiaUniversity
[Twitter] @SophiaUniv_JP

第6回

上智大学アフリカ・ウィークス

アフリカ地域との交流を活発に展開

5月16日から28日まで、「第6回上智大学アフリカ・ウィークス」が開催された。本学は、グローバル社会で存在感を増すアフリカをグローバル化推進の戦略的地域と位置付け、アフリカ開発銀行や現地教育機関との連携締結、アフリカ研究の推進など、教育・研究交流を活発に展開している。今回のアフリカ・ウイークスでは、講演会、シンポジウムの他、昨年に続き、学生企画「With Africa」を実施。学生有志の運営でトークセッションや多彩な企画の発表があった。

■西アフリカにおける言語の力　日常、ポップス～文学を横断する諺

17日、永井敦子文学部フランス文学科教授の進行のもと、国士舘大学法学部の鈴木裕之教授を招いて講演会が開催された。さらに、鈴木教授の夫人でもあるグリオ歌手のニャマ・カンテ氏がゲストとして登壇した。

13世紀に成立したマリ帝国の系譜を引く西アフリカのマンデの人々は、グリオと呼ばれる語り部が音楽化した「声の文化」を発達させた。鈴木教授は、その声の文化が近代化の中でレゲエなどのポップスや、フランス語による現代文学などにも影響を与えていることを、諺に焦点を当てて紹介した。解説の合間に、民族衣装をまとったカンテ氏が迫力ある生の歌声を披露。参加者は声の文化を体感した。

講演会は「フランス文学入門Ⅱ」の授業と同時開催され、教室で受講した学生たちは熱心に耳を傾けていた。オンラインで参加した一般の方からは、「レゲエの中で使われているアフリカの諺がおもしろかった」「歌詞の解説が興味深く、日本と共通するような諺もあれば多様な意味にとれるメッセージもあった」などの感想が寄せられた。

改修が進むメインストリート中央に鷲のエンブレムが出現。9月には1号館前広場も完成予定だ

カンテ氏が歌声を披露

■上智大学アフリカ研究紹介

19日、本学で行われているアフリカ地域を対象とした研究や実践型プログラムを紹介するセミナーを開催。冒頭挨拶で畔道佳明学長は、本学が力を注いでいるアフリカとの連携を紹介し、若い世代への期待を述べた。

セミナーでは、グローバル教育センターの山﨑瑛莉講師が、本学で開講しているアフリカ関連の科目を紹介。特に、アフリカ地域の協定校での講義、現地学生との交流、地域の人々との対話などを通して体験的に学ぶことができる実践型プログラム「アフリカに学ぶ」について説明した。

続いて、本学でアフリカ研究に携わっている3人の教員が順に登壇し、研究内容を解説した。

外国語学部フランス語学科の岩﨑えり奈教授は、北アフリカ地域を中心に研究。水問題に関し、水資源の稀少性ゆえに知恵を学べる場として研究の面白さを語った。

アフリカ研究を解説

総合グローバル学部の戸田美佳子准教授は、中部アフリカが研究フィールド。特にカメルーン熱帯雨林での共創プロジェクトを通して、現地住民が受け継いできた「在来知」と客観的な「科学知」の融合について話した。同じく総合グローバル学部の眞城百華教授は、東アフリカのエチオピアの政治やアフリカにおける紛争と女性をテーマにした研究を行っており、アフリカ各国の国会議員の女性比率が世界的に上位を占めると紹介した。

セミナーには高校生も多数参加。終了後のアンケートでは、「アフリカに対して紛争や貧困などマイナスのイメージが強かったが、良い面にも目を向けたい」「点から線へ、面へと広げ研究したいという気持ちが強くなった」など、大変満足したという感想が寄せられた。

■アフリカ地域から見た日本　共に未来を考える

24日、アフリカ地域出身者がどのように世界や日本を見ているのかを聞き、共に考えるシンポジウムが開催され、グローバル教育センターの山﨑瑛莉講師の司会のもと、3人のパネリストが登壇した。

ジェレミ・ドンガラ氏は日本在住のアフリカ研究者で、アフリカ地域出身者から見た日本について、日本の警察官の素晴らしさなどを他国と比較して語った。イヴェット・ニャンゴノ・ミンコ氏は、本学の交換留学生としての体験を紹介。現在筑波大学の博士課程に在籍するメンサー・アコト・ジュリウス氏は環境問題などグローバル社会における課題を提示した。

シンポジウムは、大学院開講科目「グローバルシティズンシップ：アフリカと共に考える未来」の授業と同時開催され、約150人が視聴した。第2部では、活発な質疑応答がなされ、予定時間を超過して盛況のうちに終了した。

本学留学経験者も登壇

■学生企画

学生有志14人により「つなぐ」をテーマとしたアフリカを楽しむ多彩な企画が実施された。

①アフリカン・チャット

28日は「アフリカを感じよう」をテーマに、アフリカ布を用いたワークショップを行った。参加者は事前に送られたキットを使って、思い思いにコースターを作成。学生団体ASANTE PROJECTによる活動も紹介した。

②日本とアフリカをつなぐインタビュー

27日は「アフリカとつながるってどういうこと？」と題し、本学卒業生など5人のゲストから、アフリカの魅力などをインタビュー形式で聞いた。

③アフリカン・ワークショップ

21日は大学生と高校生に対象を限定し、「アフリカとつながろう」をテーマにトークセッションを開催。第1部はお互いの生活や価値観から見える違いについて議論し、第2部ではフリートークを行った。南アフリカやカメルーンから現地学生が参加。日本在住の留学生も加わり、グループに分かれて議論や会話を楽しんだ。

④その他

昨年に続き、12ページの雑誌『With AFRICA』を発行した。また、運営の原田実さん（理機3）が作成したウェブサイトで、学生企画の情報を発信している。ウェブサイトはこちらから。

（3面に学生企画代表のインタビューを掲載）

現地学生とつながる

慶應義塾大学と共催

ウクライナ平和シンポジウム

両大学の研究者と学生が議論

4月29日、本学と慶應義塾大学の共催による「ウクライナ平和シンポジウム」が、両大学と関連校の学生、生徒および教職員を対象に対面とオンラインで開催された。本学四谷キャンパス6号館101教室には、約250人が来場。オンラインでは延べ730人以上が視聴した。

開会の挨拶で本学の畔道佳明学長は、平和という人間社会における根源的な価値について問いかけ、シンポジウム開催の意義を伝えた。

第1部は「ウクライナ問題をどう見るか」と題して、両大学から4人のパネリストが登壇した。本学の兼原敦子法学部教授は国際法研究者として、国際法の意義と限界、国際社会と主権国家の対応などを解説。旧ソ連地域を研究する廣瀬陽子慶應義塾大学総合政策学部教授は、ロシアが侵攻に至った背景を説明した上で、世界が協調してウクライナを支援しており ロシアが軍事的に勝利したとしても政治的な勝利はないだろうと述べた。また、鶴岡路人同准教授は、安全保障研究者の視点で、今回の侵攻の構造を分析。ロシアの行動はどのような理由があっても許されるものではないが、終戦後ロシアを孤立させ排除しても平和を保つことはできないと語った。4番目に登壇した本学の東大作グローバル教育センター教授は、アフガニスタンやシリアなどの和平調停・平和構築を研究してきたことを踏まえ、今後のシナリオを予想した。そして、スペシャルトークとして、国連難民高等弁務官事務所駐日首席副代表のナッケン鯉都氏が難民支援の実際について訴え、第1部を締めくくった。

第2部「平和構築・軍事紛争予防のために何ができるか」では、畔道学長、伊藤公平慶應義塾塾長の両名がモデレーターを務め、本学から山内梨々花さん（法法2）、齊藤良彰さん（総グ4）、シナバーガー英利佳さん（国教4）、慶應から中下璃乃さん（総合政策学部2）、ジノフ イワンさん（経済学部2）、高木裕介さん（政策・メディア研究科修士1）の学生6人が参加してトークセッションを実施。活発な議論を展開した。

閉会の挨拶で伊藤塾長は、学生自身が将来のために学び、何ができるかを考え実行していかなければならないと述べた。

当日のアーカイブ動画はこちらから。

6人の学生が登壇

質問に答える兼原教授